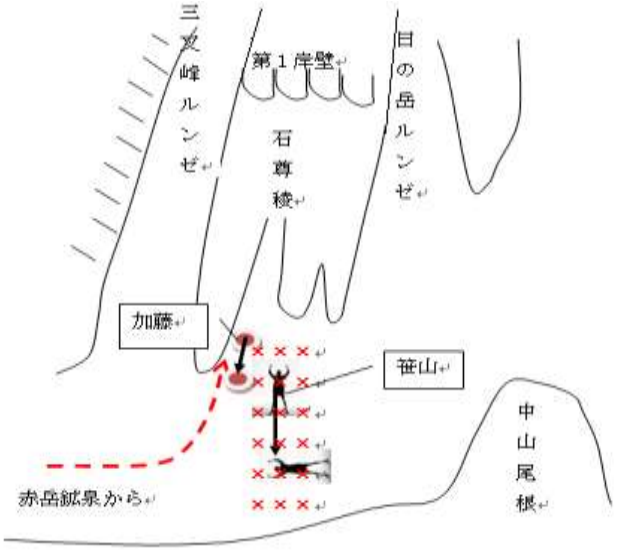
2013 年 6 月 15 日
リーダー会了承（Email）

石尊稜、雪崩遭遇事故記録書

１．メンバー：笹山（Ｌ）、加藤
２．日時：2012 年 1 月 21 日　9：30 頃
３．行動：起床 4:00-赤岳鉱泉 5:40-石尊稜末端下部 9:30(雪崩遭遇)赤岳鉱泉 11:30



４．経過
・赤岳鉱泉先の沢に入るルートから中山尾根末端までは新雪が積もり深いラッセル状態。斜面は何箇所も亀裂が入り雪崩れそうな気配を感じながら進む。
・雪崩れた現場までの急斜面を胸までの新雪をラッセルし、石尊稜付近に上がる。
・石尊稜に取付くため小さなルンゼをトラバースしようとして１歩足を出した瞬間斜面がスパッと切れて雪崩れる。
・加藤は足元をすくわれたがすぐ横の木を掴み止まる。加藤の下にいた笹山は２０ｍ下まで流される。
・上にいた加藤は笹山の姿が確認できないので二次雪崩を警戒しながら下に駆け降りる。
・固まった雪が笹山を覆っていたが手と肩が見えたので顔を掘り口を確保する。
・半身と足の雪を掘り引っ張り出す。どこか切ったらしく血が少しついていたが大したことはない。
・すぐに安全な場所に駆け足で移動する。

５．原因
（笹山記）
前日、当日雪。2～30ｃｍの積雪、沢筋を進んでいるとき、大きく亀裂が走っている。、足の周り、50cm、とか体の回り１ｍほどの亀裂は良く見られる事だが４、５ｍ先に亀裂が入ることは、今まで経験にない。クラストの硬さを感じた。そんな亀裂が５、６回あった。
（加藤記）
・雪崩の巣との認識はあった。やってはいけないトラバースをしたのが直接原因。
・加藤は気がつかなかったが、もっと上部に赤テープがあったと聞き、本来はルンゼが狭

まる上部まで上がってから尾根に取付くべきであった。

６．反省と対策

以下の「稜友ＭＥＭＯ」掲載記事参照。

「稜友ＭＥＭＯ」（掲載年月不明）

（加藤記）

1月21日、石尊稜は大変な山行になった。新雪で橋の分岐からずっとラッセルだった。石尊稜末端まで4時間かかる。始めは笹山さんが順調にラッセルする。一度交代し斜面が少し急になったところでまた笹山さんにやってもらう。しかし、いよいよ斜面がきつくなったところで笹山さんがやってくれと言う。顔がくっつくほどの急斜面の柔らかい雪をかいては膝で固めるが固まらない。何度も斜面の雪を集めて足が乗れるようにする。1時間ほどそんなラッセルでやっと石尊稜末端の最後の斜面に出る。

真っすぐ中山尾根末端を目指して沢筋に行こうとしたが雪がふかふかでラッセルがきつかったので、左を探ると雪の下はハイ松帯と岩稜なのでここを進む。岩に乗ると岩稜帯にでる。真っすぐ行くと三叉峰ルンゼの石尊稜左斜面になる。右斜面がラッセルが少ないと聞いていたので、そちらに回り込もうと斜面をトラバース始めた。笹山さんが下から「雪崩だ」と叫び上を見ると表面が波打つのが見えた瞬間足をすくわれる。極力下に巻き込まれないように雪に乗り2m程流されると木が見えたので必死につかむ。細い木だったがしっかりしていて雪がかぶさっても止まることができた。その間片手で口をふさぎ呼吸を確保する体制をとる。雪崩はすぐに治まる。上体は自由だが足が雪に埋まり力づくで抜く。

笹山さんを探すが姿が見えない。慌てて笹山さんを連呼しながら下に駆け降りる。5mほど下の斜面に赤のジャケットが少し見えた。駆け付けると斜面を横切るように横になって埋まっている。頭は完全に雪の中だ。左手が出ている。その手で顔の雪を取ろうとしているのだろうかしきりに動かしているが腕が雪で固まり空を切るばかり。胸が見えていたので手袋をはずして素手で雪を取り除く。口が見えた時はほっとした。顔は紫色に変色している。数分でも雪に埋没していたので冷え、緊張、恐怖のためだろう。頭の雪を取り除き私の膝に乗せ呼吸を整えてもらう。鼻血を少し出し唇が多少晴れている。痛いところはないと言う。腰から下が雪で固まり動かない。足の雪を除き足を雪から引きずり出す。しっかり立てる。二次の雪崩が怖いので笹山さんは尻滑りで、私は転がって、斜面を急いで下る。安定した場所まで移動し休憩をとる。改めてお互いの無事を確認し温かいお茶を飲む。下山する。橋まで2時間弱黙々と下る。

赤岳鉱泉小屋に入り、ラーメンを食べ濡れたものをストーブで乾かす。15：00頃まで小屋で暖まる。テントに戻り酒を飲みながら反省会をする。

明日は赤岳主稜をやろうと言うことになった。就寝は何時か分からない。多分20：00頃だろう。

（笹山記）

中山尾根めざし、尾根急登に差掛かる手前赤い橋が目印の沢に入る。
踏み跡は消されているが、それらしき跡をたどる。そのうち、踏跡を少し外れると、股下まではまるようになる。小同心ルンゼに差掛かる、この辺から傾斜が少しずつ増してくる、加藤さんとトップ交代し進んでもらう。

下部岸壁が左上に見えるところまで沢を詰め、下部岸壁から左に派生している、尾根沿

いの右の斜面に進路を変え、尾根に突き上げようとしたが、すっきりとした、小枝の混ざった尾根に沿った雪面を登り、そこから少し右の岩下に進んでいたとき、進行方向上７メートルほど上で真横に亀裂が走ったのが見えた、と同時に前を登っていた加藤さんの足元が崩れ迫ってきたので、少し下がり、ピッケルストップするも効かず、後ろ向きになり尻セードで流れに任せた、流されながら、ザック、頭が重いため、体が重い方向に傾き、下のほうに持って行かれる。スピードが落ち右に流され止まる。

顔が谷向きに止まったので、顔の周りには空間ができていた、20～30ｃｍ程度の雪で、大したことは無いと軽く見ていたが、抜け出そうとしても、体がまったく動かせない、金縛り状態。

右手首が顔の下に在り動かせたので、顔の周りのスペースを広げ、左ひじから先が、埋まっていないので動かせた､その手で顔までほじり返そうとしたが､しっかり締まっていて、はかどらない。

加藤さんの声が聞こえなかったので、加藤さんも埋まったなと思い、早く行かなければと雪をほじくり返していたとき、声が聞こえたので、ほっとしました。

時間的には２分ほどでしたが、酸素が薄くなるに連れ、その分呼吸が速くなってきます。その後掘り出してもらい、加藤さんの報告通りです。

反省点として、前日、当日雪です、２～30ｃｍの積雪です、沢筋を進んでいるとき、大きく亀裂が走りました、足の周り、５０cm、とか体の回り１ｍほどの亀裂は良く見られる事ですが、４、５ｍ先に亀裂が入ることは、今まで経験しませんでした、クラストの硬さを感じました、そんな亀裂が５、６回ありました。

新雪といえども流され、止まるときは圧縮され、硬く締まります、ダンプカーが荷台を上げ、スロープ状に砂を下ろしているとき、流れている砂は、水のようにさらさら流れ柔らかそうですが､下に落ち止まったときは硬く締まって､スコップでないと刺さりません。

流されると、雪より重いものは、雪の底に落ちて行きます、雪の上に出ようと、雪を下に押し付けながら、今回の場合、尻セードしながら腕を、背泳ぎみたいに動かし、しりの下に雪を入れ、雪の上に上がろうとすべきでした、効果のほどは、あるかと思います。

雪崩に遭わないよう、後の祭りにならないよう、勉強します。

大変ご心配掛けました、この前例を踏まえ、慎重に行きましょう。

加藤さん、ありがとうございました、また、行きましょう。